

小説

# 時の世にいだかれて (その二)

ゆとろ 満

## 一 ライスカレー

帰国のフライト便が成田空港に着陸すると同時にキュッとタイヤを軋ませる音がし、やがて機は停止する。ほっとした気が機内に満ちる。程なく乗客が一斉に立ち上がり、頭上のボックスから手荷物を取り出し始める。と、思い出したように東彦の胃の腑はクーと鳴り出す。眠っていた食欲が突然目覚めたのだ。「ラーメンにしようかお寿司にしようか」とらちもない映像が脳という画面いっぱい映し出されてくる。しかし、税関を無事に通じ、預け入れ荷物のターンテーブルを見渡す頃には「ラーメンにしよう」と、決断している。口の中の唾液腺もフル活動している。これ

は東彦が帰国した折のお決まりの脳活動である。

しかし、これは海外である程度の日数を過ごして帰国した人にはほぼ共通する現象と言えるようだ。「育ての食物」への原初的渴望かもしれない。東彦の同行者の中には「それが日本人の証だ」などと力む者もいる。

しかし、ここでおもしろいのはカレーライスの影が薄いことだ。やはり窮屈な姿勢で何時間も機中で過ごしてこるとこつてりしたもの拒否してしまうのだろうか。だが、二、三日もすると猛烈にカレーライスが食べたくなる。

ラーメン、寿司、カレーライスは日本人の三大国民食と言われている。日常生活の中でこのことを実感することは

ないが、しかし、思いがけない場面でこのことを思い知らされる。空気存在と同じである。普段空気を意識して生活をしている人は少ない。しかし、何かの拍子に窒息しそうなとき空気の大切さを思い知らされる。親の有難味も同じであろう。最も大切な物、根幹にかかわる物は普段は意識の下に潜在しているものである。ラーメンなど国民食は空気などと比べたら随分と格下で、それらを取り立てるのは大げさの嫌いがあるかも知れない。

が少しうわずっていた。

「二百匁、百匁でねえの」

東彦は素っ頓狂な声で母親に確かめた。

「いや、今晚は特別に二百匁だ。いいが、二百匁だから」

母親の顔は少しばかり誇らしげに見えた。東彦は「パンザイ」と叫びたい気持ちをもぐとこらえた。しかし、そこはまだ九歳、小学校三年生の子である。喜びが全身に溢れているのを隠しようもなかった。

しかし、改めて考えると、これらの国民食は単なる食品のうち止まらず、人生を彩り、物語を紡ぎ、ときには苦境時の伴侶となり励ましを与えてもくれる。

東彦にとってカレーライスは最も物語を紡ぎだしてくれるものである。

「東彦、丸八さ行って豚肉を買ってきて」

東彦は母の声を聞いて胸がパンと膨らんだ。そしていつものごとく土ぼこりや煤で汚れた顔がみるみるうちほころんで来た。

「かあちゃん、今晚ライスカレーすか」

東彦は分かりきった事をことさらに確かめた。

「んだ、今晚は二百匁(七五〇匁)だからな」

前掛けで手を拭きながら台所から出てきた母の由美の声

東彦の家ではライスカレーは一月に一度ぐらいの割合で供された。大概月の半ばか月末であった。この当時、父親の給料日は半月ごとに計二回支給されていた。ご馳走のカレーはその給料日のいずれかに合わせて調理されたのだ。前日か前々日に「ライスカレーだぞ」と母親はいつも子どもたちに伝える。その時の母親はいつもご機嫌であった。聞いた子どもたちも当然ながら大喜びで、家の中はしばしの幸せに包まれた。正月やお祭りを除いてその頃の一番のご馳走は何といってもカレーであった。このご馳走は単においしく、腹を満たすだけではなかった。普段口にすることの少ない豚肉が入っており、それが子どもたちを芯から幸せにした。昨今の言いぐさで言えば「ハッピーになる」ということである。単純と言えば単純であった。しか

し、当時のこの類いの幸せは今よりよほど価値があったのは確かである。

当時、東彦の家族は六人であった。両親と子どもが四人である。東彦が長男で小学校三年生、食い意地のはる年ごろであった。いつも母親から「いやしくするな」とか「そんなに食うんでねえ」と注意をされていた。この頃の子どもたちに「食欲がない」などということは、胃腸の病気やよほどの発熱でもない限りなかったことである。

東彦には妹が三人いた。長女の玲子、少学一年生、そして次女のさつき四歳、三女の富貴子三歳であった。こんな家族構成であったから、カレーの肉が百匁（三七五匁）でも十分であった。それでも夕食がカレーの時には盛られたカレーの中の肉の数を瞬時に数え、一喜一憂するのが東彦の常であった。母親に「みんなのことを考えて食べるんだ」などの注意を受けずにはいつか腹一杯肉を食べたい、というのが東彦の夢であった。それが今晚実現されることになったのである。

この頃の子どもたちを楽しみといえば近所の子どもたちと一緒に遊ぶことであった。その遊びも季節や年間行事に準じたものであった。冬は雪合戦、雪だるま作り、田んぼでのスケートなど、夏は川での水遊び、網での魚掬い、秋は柿もぎなどである。映画を初めて鑑賞したのもこの頃で

つも争いになるので佐藤さんは順番制にした。

観覧料は水アメ込みで五円だった。水アメは割箸二分の一程の長さで、その先端に水アメをくるりと巻いてくれる。それを子どもたちは二本の串でぐるりと巻く。アメが白くなるまで巻き続ける。そして、白くなったアメを紙芝居が終わる頃までペロペロと舐め続けるのである。子どもたちは白くなればなるほど甘味が増すと信じていた。

東彦が楽しみにしていたのは『黄金バット』である。金の骸骨に赤マントで颯爽と現れ、悪を退治する。「突如としてあらわれた正義の味方黄金バット、ウハハハハ」と佐藤さんがやると東彦ばかりでなく子どもたち全員が拍手喝采をした。また「アルプスの山々に木霊する黄金バットの叫び声」などのセリフも今なお生き生きと脳裏に残っている。

その他に『蛇太郎少年』も楽しみであった。バイクに乗った蛇太郎が悪人を追いかけるうちに上衣が千切れ飛び、裸の背中には鱗があらわれる。ついで眼がつり上がり、口からは炎のような紅く裂けた舌がチロチロと飛び出し、ついに蛇と化す。蛇太郎少年は無敵となり悪人どもをやっつけるのである。ちよっとグロテスクであったが、この変身に興奮させられた。だれにも年齢に関係なく変身願望というものがあることを知ったのはずっと後年のことである。

あった。会場は小学校の校庭で、八月のお盆前のことであつた。夕食食後の八時ごろ上映開始で、校庭にゴザを敷きおとなも子どもも上映を今か今かと待ちかねていた。勿論スクリーンは手作りで地面に立てた丸太に白い布を縛り付けただけの簡単なものであつた。上映本数は三、四本あつたが「原爆の子」という映画だけが強烈に印象に残っている。原爆で焼かれ、指先から皮膚を垂らしている子どもの姿が目には焼き付き今でも忘れられない。

他の楽しみとしては紙芝居があつた。週に二回ほど、日が長い季節は午後五時頃、短くなる季節は四時頃がスタートである。東彦の自宅の隣りの小さな空き地がわか仕立ての芝居劇場であつた。紙芝居屋さんは佐藤という太鼓腹で年の頃は四十台半ばと思われた。いつも鳥打ち帽子を被っていた。薄着の袖口の奥にちらりと入れ墨が見えた。子どもたちはなぜか使い慣れていない「さん」をつけて「佐藤さん」と呼んでいた。刺青が効いていたのかもしれない。

佐藤さんは広場に着くなり近所を拍子木を叩きながらぐるりと一回りして子どもたちに知らせる。この拍子木はしばらく後に太鼓に変わった。そしてこの合図も子どもたちにとつて代わつた。観覧料がただの上に水アメまでくれたからである。男の子たちはその太鼓打ちを奪い合った。い

この街頭紙芝居の活動期間は、一九三〇年頃からテレビが出現する一九六〇年ごろまでの間であつた。戦後の「昭和二十一年から二年にかけての紙芝居の人氣は想像絶するものがあつた」(※1)という。東彦たちにも同様なことが言えた。読書や映像を見る機会に接することもほとんどない日々の中で、紙芝居は心をときめかせ、その語り口に心奪われる数少ない機会であり、貴重な体験であつた。

夜といえば囲炉裏や炬燵を囲んでの団欒が一番の楽しみであつた。裸電灯の下でそれぞれの一日の出来事を時には自慢げに話したものであつた。時折母親や年寄りの昔話に真剣に耳を傾けた。実に濃厚な家族の繋がりの場が確実にあつたのである。家族を分断し、孤立させるような個室はなかつたし、家族から会話を奪うテレビもなかつた。

勿論当時は洗濯機もガスもなかつた。その分家事労働は多岐にわたり、しかも多くの時間が取られた。それ故幼子を除く家族がそれぞれの体力、能力に応じて家事を分担していた。東彦も九歳ながら廊下の拭き掃除や庭掃除が割り当てられていた。また、母親が病弱であつたため臥せていることも多かった。そんな時にはご飯炊き(当時は薪で炊いていた)や風呂焚き、食器洗いなどもすることがあつた。当時の子どもたちとつてこのような家事労働は当然なことであつた。農家の男の子の中には十歳ぐらいで農耕馬の世

話をしているものもいた。五、六年生では納豆売りなどを  
して家計を助けている子もいた。子どもの多くは家事労働  
の一員を構成していたのである。「よく遊び、よく働く」  
子どもたちであった。それだけに食欲は驚くほど旺盛で  
あった。子どもが六、七人もいる家庭での母親の口癖は  
「そんなに食うんでねえ」であった。主食のご飯はほとん  
どの家庭で麦飯が常食であった。家庭によっては米と麦が  
半々というところもあった。これは冷えるるとまずく、白米  
ご飯からはほど遠かった。しかし、胃にもたれること少な  
く、腹持ちもよかった。カレーは麦ご飯のこの欠点を消し  
てくれる働きがあった。

ライスカレーは一番のご馳走であったとしても、しかし  
家庭によっては貧しさが故に調理されないこともあった。  
また四つ足を食するのをタブー視する年寄りが厳然と存在  
していたことも事実であった。民主主義の世になったとは  
いえまだまだ牢固とした風習が農村地帯には残っていた。  
「おはぐる」という既婚の女性が黒く歯を染めることも依  
然として残っていたのである。東彦の母方の祖母は晩年ま  
で動物肉を口にすることはなかった。それは長い日本の歴  
史、文化のバックボーンがあつてのことであり、神道にお  
ける「血の汚れ」思想、仏教の「殺生戒」の教えの習合の  
現れと言える。敗戦後間もない日本の家庭には未だこのよ

南北に走る三間道路である。その道路に沿って東北一と言  
われた大操車場が広がる。ここでは東北線、常磐線の貨車  
の仕訳け作業が行われる。仕訳が終わった列車は蒸気機関  
車が連結され出発を待つ。この日も既に二両の列車が並ん  
で出発を待っていた。蒸気機関車は黒煙を吹いて静かにた  
たずんでいる。この操車場で活動している蒸気機関車が吐  
き出す黒煙は尋常ではなかった。風の具合で東彦たちの住  
む住宅街を襲う。黒煙は建物も木々も煤だらけにしている。  
放し飼いの山羊、犬猫、さらに人間、特に男の子たちを煤  
だらけにしてしまう。白色は全て黒ずみ灰色化してしまっ  
ている。東彦の顔がいつも煤けているのはそのせいでも  
あった。

この頃、カレーは「ライスカレー」と呼んでいた。当然  
東彦もライスカレーと呼んでいたがいつしか「カレーライ  
ス」と呼ぶようになっていた。いつころかは特定できない  
がすくなくとも大学生の頃はそう呼んでいた。大学の食堂  
のメニューに「カレーライス」とあったのを微かに記憶し  
ている。

カレーが英国から日本に伝わったのは明治時代の初めと  
されている。明治九年にはクラーク博士で有名な札幌農学  
校の食事にライスカレーが登場したとある。また、明治三  
三年頃から洋食屋のメニューの定番になったとある。さら

うな風習により食生活も縛られていたのである。そんな家  
庭の子どもたちはいわばこのような遺習の犠牲者でもあつ  
た。

「丸八」とは精肉店である。仙台市の南端に位置する西  
浦という地区にあり、東彦の家から一番近い肉屋であった。  
国道4号線から十数ほど奥に入ったところにあり、東彦の  
足で自宅から二十分の距離にあった。この当時、豚肉（中  
級）百匁が一八七円、一〇〇匁五十円ほどであった。なお、  
牛肉は百匁一六五円で、牛肉の方が安かった。（※この牛肉  
の需要が豚肉よりも少なかったためであろう。（なお、関  
西と関東では若干事情が異なる。関西は豚肉より牛肉が好  
まれていたので牛肉の値段は関西は高かったと推測され  
る）

東彦は母親から薄汚れた百円札三枚、五十円札一枚、  
それに十円札二枚をもらおうと買い物用のがま口に押し込ん  
だ。そしてそれを藤蔓で編んだ買い物かごに入れると勇ん  
で玄関を飛び出した。かごの中でがま口が踊っていた。  
「気つけて行くんだぞ」

母親の大きな声が背後に響いていたが、東彦の耳には届  
かなかった。東彦には丸八の親父さんの顔しか見えていな  
かった。

自宅を出て右手に折れ百匁ほど進むとT字路にぶつかる。

に大正から昭和にかけ軍隊食として浸透し、ここから帰還  
した兵士を通じて家庭に普及したという。

当初はライスカレーと呼ばれていたが、ある時点からカ  
レーライスという呼び方に変わってしまった。どうやらそ  
れは一九六〇年代からのようだ。高度成長期に入ったのと  
軌を一にしていたとも言える。一九五〇年頃から固形カレ  
ールーが登場し、各社のシェア競争が激化し、それと共に  
カレーが国民食として定着し、呼び方もカレーライスへと  
収斂していったと思われる。

但し、ライスカレーとカレーライスの呼名については区  
別があつたようである。カレーライスは、本来はカレーと  
ライスが別々になって出されるものを指す。魔法ランプの  
ような形の入れ物にカレーが入って、ライスは皿に盛って  
ある状態。高級なレストランなどで出されるイメージがあ  
る。ちなみにこのカレーの入れ物の正式名称は「グレイビ  
ーボート」という。それに対し、ライスカレーは皿に盛つ  
たライスの上に、すでにカレーがかかっている状態を指す。  
つまり一般家庭で食されるものはカレーライスではなく、  
正確にはライスカレーであるというわけである。（※3）  
ちなみに一九六〇年製作の韓国映画『下女』の中で、家  
族が夕食でカレーを食べているシーンが出てくる。そこで  
は「ライスカレー」と字幕にあつた。

東彦が丸八に着いたときには額から汗がしたたり落ち、また背中也濡れていた。息も少し上がっていた。先客の三十代後半の女性がいて、店主はその女性との会話に夢中のようにだった。「かあちゃんとは随分と違うしやれた人だ」思いながら東彦は額の汗を右腕でぐいと拭き、息を整えた。壁の上部にある窓から差し込む日差しが輝いていた。九月半ばは依然として日差しは厳しい。しかし、午後の三時過ぎともなると急に弱々しくなる。東北の秋が足早に近づいていた。その日差しにぼんやりと視線を向けていると「今日はとうちゃんのご給料日とはずれているな」という疑問が湧いて来た。だがそんな疑問はあつという間にかき消えていった。東彦にはそんなことはどうでもよかったのである。

「ご馳走さま」

女性はその言いながら背の低い底広のガラス瓶とスプーンを店主に返した。瓶の底には白いものがまだらに残っていた。ヨーグルトであった。

その声に東彦の疑問はどこかに飛んでいってしまった。そして乾いた口の中にじわりと唾が湧いて来るのを感じた。東彦は慌てて唾をぐくりと飲み込んだ。そして上目遣いに店主の顔を見た。東彦はまだこのヨーグルトと言うものを食べたことがなかったのである。この丸八にお使いに来る度にガラス棚に鎮座しているヨーグルトをちらりと見ては

「おう三百七十円びつたりだな、ありがとう。気いつけて帰るんだぞ」

東彦は店主の言葉を背に受け店を後にした。東彦の足は来た時よりも軽かった。それに心も弾んでいた。店主の「店のおんつあんがおまけしてくれたよ」という言葉を伝えたときの母親の笑顔が目には浮かんできたからだった。急ぐ東彦の足下からは砂ぼこりがポツ、ポツと舞い上がり、秋の強い西日が乾いた砂利道に東彦の長い影をつくっていた。

東彦は帰宅すると遊びには行かず彼の分担である縁側の拭き掃除を始めた。彼にしては珍しいことであった。いつも門限の五時に間に合うことは滅多にない。いつも遅れしかり飛ばされながら嫌々取りかかっていた。やはりこの日の夕食のカレーが大いに効いていたのだ。また、四時を少しばかり過ぎてしまっていたので遊びに出かけてもすぐに帰宅せざるを得ないという事情もあった。当時、東彦の自宅は建築して一年ほどしかたっていない、木の香もまだ消えていなかった。元々は田んぼであった。敷地は八十坪ほどで、この田んぼを砂利の販売、運送業をしていた母方の叔父が本業の合間をみて半年ほどの日にちをかけて埋め立ててくれたのであった。当時は全て手仕事である。トラッ

小さな溜息を漏らしていた。食い意地のはった少年にはまぶしい食物であった。

「東彦、随分汗かいているな。走ってきたのか」

店主に心を見透かされた思いに東彦は言いよどんだ。

「いつもの肉だな」

「今日は二百匁だつちや、おんつあん」

店主の言葉に救われた思いで、東彦は思わず声を高くした。そして鼻が高くなったような気がした。

「二百匁か、今日は給料日ではないし、何かいいことあったのか。それにしてもお前はよく手伝うやろつこだな。少しおまけしておくからな」

店主は商売柄、顧客の家庭事情にも通じていた。

「ありがとう、おんつあん」

東彦は「給料日」のことには触れず、大きな声で礼を言った。「おまけ」の言葉が単純に嬉しかったのだ。

店主は台秤の上に経木を敷き、その上に肉を載せた。そして「よし、二百匁」と大声で言うと、その上にひとつまみ肉を載せた。そして経木の両端を内側に折ると新聞紙でくるくると上手に包んだ。真ん中を紐で縛ると「お待ちどう」と言いながら包みを東彦に手渡した。東彦は伸び上がりながらその包みをかごに入れた。そして、それと交換にがま口から出していたお金を店主に手渡した。

ク一台にシャベルでヨナをいっばいに積み、そして田んぼに着くやまたシャベルで降ろすのである。ヨナとは川砂に粘土質の土が混じったものである。川砂より粒子が細かい。水はけがよいが安定性に欠ける。従って地盤がゆるく耐震性には弱い。このこともあつて一九七八年の宮城県沖地震では東彦の家は崩壊寸前までの被害を受けたのである。

この頃、近辺のほとんどの家はよほどのことがない限り鍵は掛けなかった。夜間でさえそうであった。あまつさえ夏期は雨戸なども閉めず開けっ放しであった。現在と比べ当時の平均気温は低かった。仙台地方の夏季で三十度を超える日はそうなかった。元々日本の家屋は開放性を特徴としている。夏向きに設計されているのである。従って家屋の表はほとんど戸で占められていると言つてよい。裏側も表ほどではないがやはり戸がある。これらを開けっ放しにする風通しは極めてよい。無風で蒸し暑い日や雨の日は別として他の日は快適であった。反面、冬季は容赦なく寒さが屋内まで進入してきた。

当時、東彦の家では屋内の暖房は炬燵と火鉢だけであった。それでもこれは増しの方で、近所には火鉢だけという家もあった。また大概の農家は囲炉裏の薪の火だけであった。今思うに、零度以下の厳寒の日などはよく堪えてきたものと思う。「子どもは風の子」ということわざが文字通

り生きていた時代であった。その分、あかぎれ、しもやけは多くの子ども、女性たちを悩ましていた。

また道路も未舗装であり、天気が続けばほこりが舞い上がり、雨が降れば泥道と化した。道路のほこりも自宅に吹き込む。さらに自宅の真ん前には蒸気機関車の燃料用の練炭製造工場があり、南風の時にはその工場の煤煙や原料の粉炭が風に乗って襲いかかって来た。それに蒸気機関車の排煙も加わり家の汚れ、ほこりは尋常ではなかった。当時公害という言葉はなかったが、東彦たちは完全な被害者であった。こんな訳で家の掃除は朝夕必須であった。縁側は長さ三間半（約六・四尺）幅三尺（約九一センチ）であった。ごく狭い面積であったが全部拭くまでにバケツの水を二度ほど取り替えなければならなかった。

掃除が終わりがけた頃、台所からトントンという母の野菜を刻むリズムミカルな包丁の音が聞こえて来た。具のジャガイモとタマネギは自宅の東側にある畑で採れたものである。父が仕事の合間をみて耕作している。およそ二百坪ほどであった。カレーの具はこれらにニンジンと豚肉を加えたものである。今こそシーフードと言って肉の代わりに魚類や貝類を具にするカレーや夏野菜カレーと言って野菜中心のものがあるが、当時はこのようなものはなかった。

ときにはなたで扱ひ易い大きさに切り揃えた。味噌汁やおかずの煮炊きは七輪が使われていた。燃料は木炭であったが練炭、そして灯油と時の経過と共に順次変わっていった。炊飯用の燃料も順次木炭、電気と変わっていった。

水道はなかった。井戸水であった。家を建てて二、三年は後ろの家の井戸水・吸い上げポンプの水を借りていた。距離にして十メートルあるかなしであったが天秤棒の前後に水一杯のバケツを運ぶのは難儀なことであった。自宅に井戸を掘った後もやはりバケツで運ばなければならなかった。その労力は相当なものであった。しかも東彦の家界隈は鉄分を含んだ水で濾過しないと飲料水としては使えなかった。ドラム缶半分ほどのコンクリート製円筒容器の底から砂利、木炭、シユロの表皮にある繊維毛を網状にしたもの、砂と順次に積み上げて濾過装置とした。ポンプで汲み上げた水はこの装置の上に直接流し込む。少し時間を置くと最下部に差し込んだ管から水が出始めると言う訳である。しかし、管から出る水量は少量で不便なことこの上なかった。

家事労働の総量は母親一人の手にはとても処理しきれなかった。四、五歳の幼子さえも何がしかの家事を分担

固形カレールーは一九五〇年（昭和二十五年）頃登場したという。しかし、東彦の家でこのカレールーが使われるようになるのはその翌年頃からであった。従ってカレールーはこれまで通りうどん粉（小麦粉）にカレールー粉を加え、さらに水を足し、よく練る。少し置いて発酵させて使用しようだった。このルーで大事なことはよく捏ねることである。そのためには水加減も重要になってくる。捏ねりが不十分だと小麦粉の小さなつぶつぶができてしまう。これはどんなに煮込んでも消滅しない。従って食べていると口の中で割れて白い粉が飛びだしてくる。極々小さい粒ではあるが、折角のカレー味を減退させてしまうのである。この手作りルーは細部のところまで気を遣わなければならないのだ。また、東彦の家族のように幼い子どもがいる家庭では辛さを抑えたものにしなければならぬ。いわば調理人たる母親の腕の見せ所が随所にあつたのである。また、豚肉は現在のようにカレールー用として販売されている角切りのものではなく中肉であった。そのままであると大きすぎるので半分に切って使っていた。

炊飯はかまどで燃料はマキであった。製材所で丸太の端を切り落としたものを購入し、それをまさかりやおの、

しなければならなかった理由が分かるのである。家族が家族たるゆえんは単に同じ血が流れているとか同じ屋根の下で繰らすということだけで成り立つのではない。家族が共に生活する上で欠かせない家事を協同行うことから成り立っているのである。それは同時に文化の継承でもあった。この時代、家族という制度が持つ機能が十分に働いていた。

食事は居間で摂られた。居間は八畳ほどあり半分は畳敷き、半分は板間であった。食事はこの板間に飯台を置いて行った。飯台は卓袱台と同義語であるが、東彦の実家近辺では卓袱台は円状か、小ぶりのものを指していたようだ。東彦の自宅で使用していた飯台は縦一・二メートル六十センチほどで、脚は折り畳み式になっていた。長いことよく使い込み、手入れされていたので渋い茶褐色に輝いていた。どの家の主婦も炊事用具や家具の手入れは怠らなかつた。伝統的な茅葺きの農家は杉の一枚戸や板間がつきものであるが、それらはよく磨き込まれ、鈍く光り輝いていた。何代もの女あるじを中心とした女性たちが磨き続けてきたのである。心血を注ぐという言葉があるが、これらの杉戸や板間には歴代の女性たちの心血が注がれ、光沢をはなっているのである。それらは新建材に

ないみごとさであり、美しさであった。東彦は今でもその光景がありありと浮かんでくる。この飯台は食後、脚を畳み台所の隅に立て掛けて置いた。

この当時はどこの家でもそうであったように食事のしつけは厳しかった。箸の持ち方、使い方、茶碗の持ち方、座り方、姿勢と幼児の頃から口やかましく注意された。また、食事中のおしゃべりや箸やスプーンで音を立てることも御法度であった。さらに食べ残しも厳しく注意されたものである。東彦の脳裏に焼き付いて今でも離れない所作がある。それは祖母の魚の食べ方、特になめたカレイ（「ばばがれい」の異名）の食べ方である。箸で身をきれいにほぐし、食べる。さらに「ピリンコ」（魚のえんがわ）は口に入れて身だけ吸いとって骨だけを皿に戻す。皿には骨と煮汁だけになる。それに湯を注ぎに飲み込む。これで骨にわずかばかり付着した身はきれいさっぱりとなくなり、白い骨だけが残る。この骨も最終的に猫の胃の腑のなかに納まるのである。一切の無駄はなく、一つの命がものに見事に他の命へと受け継がれているのである。見事な食物連鎖であり、「もったいない」精神の完璧なる発現とも言える。

東彦の家の夕食は午後六時前後であった。近隣の農家が

午後七時か八時頃であったから比較的早い時刻と言えた。

父親は国鉄の貨物列車の機関士であったから夜勤もあった。しかし、この日は明け番（勤務がない日）であったから家族全員が揃っての夕食であった。カレイの日であるから当然のことではあった。一番下の妹が三歳でまだ多少手が掛かったが、その盛りは過ぎていた。長女の玲子は六歳を過ぎ小学一年生であった。玲子は母親の手伝いをよくし、小学一年生とは思えないほどの立派な働き手であった。飯台の設置や食器、スプーンなどを卓上に並べることも進んでやっていた。末っ子の富貴子の面倒は一つ上の佐津紀がしていた。富貴子は佐津紀によくつき佐津紀のすることはなんでもやりたがっていた。富貴子もカレーが大好きで、できあがる前から「カレーだ、カレーだ」と喜んでいた。女の子三人であったから静かに食べるということはあまりなかった。しかし、父親の「静かに食うんだ」という一声があるとしばらくの間はシーンとなった。

「いつもより肉が多いね」

「んだ、んだ」

富貴子の声に玲子も佐津紀も笑顔で相槌をしている。

「とうちゃんのお陰だからね。みんな感謝しないと」

「とうちゃんありがとう」

子どもたちは母親の言葉に声を揃えて感謝する。

子どもたちの明るい声に普段あまり感情を表に出さない父親の長次であったが、さすがに顔をほころばせた。

「んでも今日は給料日でねえしやね」

胸に潜んでいた疑問の声を思い出したように東彦はぽつりと言った。

「ほんなことはいいの。とうちゃんがたまには腹いっぱい肉をくわせろということだから。特別、特別だから」

母親は「特別」という言葉に力を込めて言った。

「ああ、そうすか。特別なんだ」

東彦はすっかり納得した顔でスプーン山盛りのライスカレーをほおばった。そして口をもぐもぐさせながら、

「とうちゃんありがとう」

と言った。

「あんちゃん、口さもの入れたままで言うなんて行儀悪いよ」

玲子がおとなびた声でたしなめて来た。

「んだ、あんちゃん行儀悪い」

富貴子も口を揃えて言った。

「とにかく今日のライスカレーは特別だから。特別うまい」

東彦の偶然のしやれであった。言った本人も気付いていなかった。妹たちもだれ一人として気付かなかったのは当

然であった。

「バカ言つてしようがねえ」

母親が苦笑いしながら言った。

日頃から厳しく、気難しく、「いんびんたかり（気難しい人）」の父親は、しかし、顔をしかめることもなく、むしろかすかに笑みを浮かべていた。

「ああ、食った、食った。もうこれ以上入らない」

東彦が膝を崩し、体を反らし、膨らんだ腹を撫でた。

その満足げな声は、実は家族全員の気持ちであった。

「あんちゃんまた行儀悪い」

とうとう玲子の声に家族が一斉に笑ったのが何よりの証拠であった。

食後、母親の由美が東彦を台所にそつと呼んだ。

「いいが、これを裏の智子ちゃんちに持って行って。そつとだぞ」

「何っしや」

「カレーだ。今日はたくさん作ったから智子ちゃんたちにも食べてもらおうと思つてな」

東彦は受け取ったザルの中を見ると中は布巾で覆われていた。中央部に黄色いシミが見えた。由美は何かにつけて智子のところにおかずや餅などを東彦に届けさせていた。

「いいか、あわてて行くんでねえぞ。ゆっくりいくんぞぞ。」

ザルと中の皿は明日でいいからっていうんだぞ」

「分った」

と言いながら東彦は玄関からではなく台所の出口から外に出た。東の空から満月に近い月が輝いていた。外はお昼の暑さとは違い、涼しく虫の声がかすかにしていた。

智ちゃんは母親の幼友達である。朝鮮籍の金山さんと結婚し、東彦より二歳下の男の子がいる。啓造というがいつも「チョウセン、チョウセン」といじめられている。それを聞きつけると父親の金山さんはいつも「チョウセン、チョウセンとパカにするな。おなし米のメシくてどこちかう」と子どもたちを叱る。子どもたちはそれをまた真似して啓造をはやし立てていた。イタチごっこであった。こんなことであったから啓造はいつもひとりぼっちであった。

東彦は啓造の母親が自分の母親と友だちであったので、いじめには加わることはなかったが、さりとて友だちになるほどの行動も取らなかった。

啓造の家は後ろの新井さんの家の北側に立て掛けただけの物置のようなものだった。間口一間、奥行き五間ほどのうなぎの寝床のようなもので家とはとても言えないものであった。東彦の地域ではこのような建物を「さっかけ」と呼んでいた。「さ」は接頭語もしくは「小」の意味。「かけ」は「掛け」で「わずかな材木で壁に掛けるように造ら

れた建物」の意と考えられる。

「いつもありがとうね。かあちゃんによく伝えて」

智子のお礼の言葉もそこそこに聞いて東彦は飛んで帰ってきた。しかし、彼の眼底には薄い裸電球の下でじっと東彦を見詰めていた啓造の姿を見逃すことはなかった。

## 二 新しい蚊帳

「ただいまあ」と、東彦は開いた玄関口から奥に大声で叫んだ。カレーの日から二日が過ぎていた。

「お帰り」と、母の声が木霊のように返ってきた。母親の由美は台所で何かの家事をしているようであった。妹たちの笑い声がする。

「腹減った、かあちゃん。何がねえすか」

東彦のお決まりの言葉である。

「待ってる、いまトウミギ（トウモロコシ）茹でているから。友だちが来てるか」

「うん、おれんちでひと休みしてから家に帰るってさ」

東彦の後ろには子どもたちが金魚のフンみたいにくっついている。東彦の通う学校は自宅から百メートルほど、その間は田んぼである。級友の中では東彦が一番学校に近かった。東彦の自宅を経由して下校する男子の大部分は教科書の入った風呂敷包みや手提げ袋などを持ったまま東彦の自宅

に寄っていた。当時、東彦のクラスでランドセルを持つ子はほんの数人であった。

「何人だあ」

奥から母の長い声が返ってくる」

「四人だっちゃあ」

東彦は大声で返した。

「少し待ってる。もう少しでトウミギが茹であがるから」

台所から出てきた母は子どもたちを見回しながら言った。末の富貴子はモンペ姿の母の脚にまわりついていて。目を見開いたままの佐津紀がその後ろに、少し離れて玲子が警戒するような目つきで男の子たちに視線を向けている。妹たちは母の手伝いでトウモロコシの皮をむいたりしていたのだろう。

「みんな、よがったな。トウミギくえるんだぞ」

東彦は後ろを振り向いて級友たちに弾んだ声で言った。

「よがった。おれ、すこたま（とても）腹減ってたがらな

東彦の家に寄ってもよがった（得した）なや」

「んだ、もうがった」

「おばちゃんありがとう」

育ち盛りの子どもたちに食べ物は何よりであった。十二時半頃にコッペパンと配給ミルク、それにおかずの給食を食べていた。しかし、それらはすっかり消化され、子ども

たちの胃の中はすでに空っぽであった。

「みんな、トウミギが茹であがるまで縁側で待っていっぺや」

東彦の呼びかけに四人はにこにこしながら縁側に座り込んだ。

この当時のトウモロコシは甘さなどほとんどなく、しかも固かった。飼料用とイメージすると理解しやすいかもしれない。八月のお盆の頃が最盛期だったようだ。九月となるとさすがに少なかったが、何ととっても自分の畑で栽培していたものだからこの時期までもったのだろう。

東彦の住む村社会には、おやつなどという言葉はなかった。それに近いのは「たばこ」というおとな用の言葉である。農作業や現場作業でとられる午前十時頃と午後三時頃の休憩時間のことである。その時には「たばこにすっぺや」とか「たばこの時間だね」と表現される。「タバコを吸う、一服する」が転じて「休息する、ひと休みする」になった。同時にお茶が入り、漬け物や時にはトウモロコシや蒸かしイモなどの口にするものが出される。これらはほとんど自家栽培物かもらいものであった。このちよつと「小腹」を満たす食べ物を派的に「たばこ」と称し、「おやつ」の意味も持つようになったと思われる。おやつと言うとかずのこが思い出される。三月のニシン

の漁期になると大概の家ではニシンの箱買いをする。そして塩漬けや糠漬けなどの保存食を作る。その折、かずのこも塩漬けにしたり、またそれを天日干しにし、やはり保存食とした。この頃、子どもたちが「腹減った」などと言うと「かずのこでもかじっている」と母親などの返答が返って来たものである。大概の子どもたちは「またか」と内心では舌打ちをしたものである。それほどニシンやかずのこはありふれた食品で「猫跨ぎ(魚の好きな猫さえも跨いで通る)」などと揶揄されるほどであった。

由美は人の面倒見がよく、子どもから年寄りまで満遍なく世話をしていた。近所の人が「醤油貸してけさい(ください)」とか、時には「米貸してけさい」などと言って来るのはしょっちゅうであった。それに料理もよくしていたので、村の寄り合いの食事作りなどには殊の外重宝がられていた。したがって彼女の元には人もよく集まっていた。

東彦の友だちもよくこのことを知っていたので中には「おぼちゃん腹減った。何がないすか」などとまるで我が家のように遠慮なくねだる子もいたほどである。村全体が子どもを面倒見るといふ風潮があったのでそれだけに子どもたちには過ごしやすい環境であった。

程なくして由美が湯気の立つトウモロコシが入った箒かごと新聞紙を持って来た。

西日に染まった子どもたちの顔が輝いていた。

東彦は、食べかすの入った箒かごとを持って台所に向かおうとして居間に隣接する八畳間に何気なく目を遣った。すると奥の押し入れの前に大きな包みが置いてあるのに気付いた。茶色い紙で丁寧に包まれている。何か大事そうなものに見えた。東彦の好奇心がむくむくと持ち上がって来た。「かあちゃん、八畳間にあるでっかい包みはなにっしや」台所で飯台を広げて妹たちとトウモロコシを食べている母に問いかけた。

「あれが、あれは蚊帳だつちや」

「かやー」

東彦は目を丸くして大声で問い返した。

「んだ。今までの蚊帳は古くて、それに六人寝るには小さいべ。とうちゃんと相談して思いきつて買ったんだよ」

「ほんじゃ今晚から使うの。どっちの部屋に吊すの」

「今晚とうちゃんが帰ってきたら相談すっかなと思っただ」

「おれだづ(誰たち)が使えてえな」

東彦はすっかり興奮していた。これまで使用して来た蚊帳は、母親の結婚の祝いに母の母、即ち東彦の祖母が贈ってくれたものだった。もう十年ほど経っていた。元々浅黄

「熱いから気を付けて食うんだよ」

と言いながら新聞紙を広げるとその上に箒かごを置いた。子どもたちは我先になつて手を伸ばして来た。

「あつちち」と言いながらそれでも指先の上でトウモロコシをクルクル回し、さらに口を尖らせながらフーフーと吹いている。

歯の先でちよつと嚙り、またフーフーと息を吹きかける。忙しいことこの上ない。それでも満足気に「うめえ」と叫んでいる。この時期の子どもたちは何を食べてもおいしいのである。幸せな年頃と言えるのだ。まるでトウモロコシと戦争でもしたように騒がしい時が過ぎると「あーっ、うめかったなあ」と心の底から感嘆の声を出すのだった。少しばかり腹の満ちた子どもたちは散らかったトウモロコシの実などを片づけると「おぼちゃんご馳走さまでした」と奥に向かつて叫んだ。

「はい、気を付けて帰るんだぞう」

由美の明るい声が返って来た。

「気を付けて帰るんだぞう」

母親の真似をした富貴子の声もする。

子どもたちはその声に笑いながら「はい、どうも」と言いながら門に向かった。そして門の所で振り返ると東彦に向かつて一斉に「また明日ね」と声を出し、手を振った。

色(緑がかつた薄い藍色)だったが汚れのせいか黒がかり、ほころびに継ぎ当てをしたところが二、三箇所あった。六畳間で、子どもたちが成長するにつれ家族六人では小さくなりつつあった。それにしても夏が終わり秋口も過ぎようとしている。蚊の飛び交う盛りも終わっている。夏の盛りでなくこの時期の購入は「どうしてなのか」と、子ども心にも東彦は疑問を持った。しかし、喜びの方が圧倒的で疑問などすぐに追いやってしまった。

「ホテルがいたら新しい蚊帳に放すんだけどなあ」

自宅の前は田んぼが広がっていた。幅一メートルほどの小川が自宅の前の道路に沿って流れていた。その流れは十メートル離れた大工さん宅の前でもう一つの同じような幅の小川と合流する。そして、二百メートルほど先で直角に近い角度で右に折れ、ゆるやかに右、左と蛇行しながら一面に広がる田んぼの中を流れていく。そして小学校の東側で二メートルほどの川と合流し、最終的には笹川に流れ込む。この笹側も名取川に合流し、太平洋へと流れ込むのである。

この小川はメダカ、フナ、ナマズ、ドジョウなどが棲む豊かで、その上、子どもたちには格好の遊び場でもあった。時にはウナギや在来種のイシガメやカラス貝も姿を見せることがあった。このように生き物の豊富な小川であったので夏期には無数のホテルがポツ、ポツと光を点滅させなが



ら稲田の上を浮かぶように飛んでいた。時折、子どもたちは団扇とネギ畑で折ったネギの茎を手にしてホタル狩りに行く。小川の縁沿いに歩いて行くと目の前をホタルがアツプダウンしながらゆつくりと過ぎる。それを団扇で掬うようにして捕まえようとす。しかし、その瞬間にホタルは俊敏なチョウのように変化し、団扇の上、下をサツとくぐり抜けてあつという間に手の届かない距離に行ってしまう。何とか捕まえたホタルはネギの茎に入れる。ホタルにはネギの臭みがさぞかし迷惑であつたろうと思う。

東彦もこのホタル狩りにはしよつちゆう行き、捕らえた獲物を妹たちに見せびらかし、自慢したものである。そして、このホタルを蚊帳の中に放す。ホタルは一時蚊帳の中で飛び交うが、東彦はその結末は見ることなく朝を迎えていた。もちろんホタルの姿はどこにもない。たまに小さな黒い虫となって畳とか寝具の上でみつかることもある。このゴミのかけらのようになったホタルはあまりにも無残に見える。幻想的で、優雅な、そして愛らしい姿は微塵もない。これは人間の残酷な仕打ちでもある。ホタルが飛び、フナを掬い、ナマズを突いた小川も六、七年後には油が浮き、ホタルは元より魚もすまない川になってしまうのである。

結局その夜、新しい蚊帳は、しばらく東彦と上の妹二人

音である。その音はまるで地上の全てのものをわしづかみするような有様であつた。そしてバリーンとかドカンとかいう落雷の音がいくどもした。特に近くの高圧線の鉄塔に落ちた時には黄色い火花が四方に飛び、家がビリッと揺れた。この世とは思えないほどの騒ぎであり、恐ろしさであつた。気性の激しい飼猫のトラもさすがに部屋の隅で縮こまるほどであつた。なぜか東彦はこの雷が大嫌い、少しでもピカとかゴロツとでも見えたり聞こえたりすると「かあちゃん、早く蚊帳釣つて」と叫ぶのが常であつた。そして蚊帳の真ん中にすくだまり、雷が過ぎるのを待つのであつた。しかし、ところどころにほころびの見える蚊帳はどうにも信用ができず、小さな破れから雷が飛び込んで来やしないかと気が気でなかつたのである。しかし、この真新しい蚊帳であれば心配はないと思つた。そう思つたら東彦はあつという間に眠りに落ち込んでしまつていた。

### 三 カネヘンブーム

「行つてまいりませう」と台所で片付けをしている母親に大声で挨拶をし、玄関を出ようとした東彦に、母親が「ちよつと待つて」と声を掛けて来た。そして、前掛けで手を拭き拭き台所から出てきた。

「もう友だちが来て待っているつちや、何しや」

で使い、両親と末の妹は奥の六畳間で古い蚊帳で休むことになつた。東彦は元より、上の妹二人もうれしきでいっぱいであつた。新しい蚊帳はブンと植物の匂いがした。もち草（東彦たちの地域でのヨモギの呼称）の若芽のような爽やかな香りである。東彦は蚊帳の裾をブンブンと嗅いだ。何か元気がもらえるような気がした。

「あんちゃん何してんの」

妹の玲子の口調は東彦を咎めるようであつた。

「何もしてねつちや」

「早く寝たほうがいいよ」

三つ下ながらしつかりものの玲子はまるで母親のような口調であつた。

蚊帳の中は別世界になる。部屋の中にもう一つの部屋、むしろ異空間とも言える空間が出現するのである。細かい網目の中に臥せるものを優しく包み込み、網目の向こうは見慣れたはずの風景なのにまるで異境のような錯覚を与えた。東彦はこの蚊帳の中には仏様がいるように思えた。そう思うと仏様の慈愛に包まれたような気分になり、いつしかとうとうとし始める。そのぼんやりとした頭に「ああ、もう雷様はおんかなぐねえな」という言葉が浮かんで来た。東彦の辺りは東彦が中学へ入学する頃までは雷がしよつちゆう発生した。それも天をつんざくようなバリバリという

「東彦、友だちや先生に新しい蚊帳買ったなんて絶対しやべつたらだめだぞ」

「何でつしや」

「何でもいいから黙っているんだよ。わがつたか」

「わがつた、わがつた。黙つてればいいんだすべ」

右の腕を友だちに引つ張られているような塩梅の東彦には、母親の言葉はほとんど馬耳東風に近かつた。とにかく一秒でも早く友だちのところに行きたかつた。一方、母親の由美にすればおしやべりの東彦の口になんとか縛りを掛けておきたかつたのだ。

「東彦は口が軽いからな。余計なことしやべつて他の人に誤解されたらまずいからね。かあちゃんの言うことちゃんと聞くんだよ。とにかく昨日買った蚊帳はしばらく内緒にしておくということだから」

「かあちゃん、学校へ行くつていう間際にごちやごちや言われたら頭おかしくなるよ。とにかくわがつたから」

「それもそうだな。朝の忙しい時間にもうすわけねえことすたね。気を付けて行くんだよ」

由美は「行つてらつしやい」と東彦の背中をかけた。門の所には四五人の同級生がかたまつておしやべりをしている。「ごめん」という東彦の声に友だちは一斉に顔を東彦の方に向けた。みな笑顔である。門の向こうは一面の

水田が広がっている。水田には一月後に刈り取り予定の稲穂が朝日を浴び、金色に輝いている。その水田の南東の角に小学校の建物が見える。まるで広がる稲の海上に浮かぶ船のようである。学校は落成してまだ七ヶ月しか経っていない。体育館はまだなく校舎一棟だけの簡素な学校である。校舎は一つの階に八教室ほどある総二階づくりで一階の西側に平屋の給食調理室と用務員室、それに宿直室があった。校庭は小さな校舎に不釣り合いな広々としたものである。校庭の南側は軍需工場であった東北金属の建物が広がっていた。戦後工場は生産を縮小し、校庭に隣接している幾棟もの建物はところどころ壁が剥がれ落ちていた。

子どもたちは誰言うことなく走り出していった。この頃はやりだしたサッカーもどきのボール蹴りのゲームを早くやりたくてしようがなかったのである。子どもたちは昇降口の下駄箱に下駄や草履を入れるとド、ド、ドウと荒馬のごとく階段を駆け上っていく。だれも上履きなど持っていない。裸足である。早く勉強道具などを二階の教室においてボール置き場にボールを取りに行くためである。階段の踊り場の壁には「階段はしずかに」という注意書きが貼られていたがだれも見向きもしなかった。東彦は下駄箱のところで手間取りみんなから少し遅れてしまった。先にいく友だちの後ろ姿を追いながらふと、「なんでかあちゃんはあ

んなに蚊帳のことしつこく言ったのかな」と、疑問が湧いた。しかし、ボール蹴りゲームがすぐにその考えを追い出してしまった。校庭には三角野球やドッジボールに興じている五、六年生たちが三十人ほどいた。校庭の東隅には三、四人のおとなたちが地面を掘ったり、掘った穴の中でふるいを振るっているのが見えた。

「もう鉄屑掘りのおんちゃんたちが来ているよ」  
目ざとい水元が叫んだ。

学校の敷地は元は軍需工場、東北金属の所有地であった。戦後遊休地であったものを市が買い上げて校地にしたのである。東端には結構な大きさの池があり、蒲が生えフナなどの魚類も豊富で休みともなると多くのおとな、子どもたちが釣りを楽しんでいた。この池は元は今の二倍ほどの大きさだったようだ。しかし、長年にわたり工場の廃物の捨て場にされ、今では半分ほどの大きさになってしまったのだろう。

「今日の日曜日、おれたちも鉄屑掘りにいぐつか」

「水元、おめえそんなごとすて先生にわがったら、どんだげごしゃがれつか(叱られるか)わがんねど。もう学校さくんなど言われたらなんじよすんだ」

当時の子どもたちにとつて授業時間を除けば学校は解放地区のようなものであった。自宅での母親たちの小言、家

事などから逃れ、多くの友だちと楽しく過ごせる自由空間であった。それに昼食の心配はなかった。学校が用意してくれたからこんな幸せなことはなかったのである。

「水元の言うとおりで。ちよつとおれの知恵が足りなかったな」

ムネオは頭をかきかき苦笑いをした。ムネオの父親は満州で戦死したのだ。母親はムネオを含めた三人の子を抱え農家の手伝い、行商など暇なくコマネズミのように働き家計を維持していた。必然ムネオも納豆売りなどをして家計を助けていた。そんなこともあり、会話の中にはおとなびた言葉が混じることがあった。

昭和二七年、戦後から七年が経過していた。しかし、国民の多くは貧しく、ひもじかった。農家の男衆などは塩が吹き出した文字通りのカリカリの塩引(塩を強くして漬けた鮭)やこれまた塩が吹き出した茶色の固い鯨肉一切れでお湯や水をぶっかけたどんぶり麦飯を二杯も三杯も食べた。とにかくこれぐらいの炭水化物を摂取しないと過酷な農作業に堪えられるエネルギーが補給できなかったのである。

他におかずと言えるものは手製の塩味たつぷりの漬け物だけである。通年であるのはダイコンの糠漬け、季節の物はキュウリ、ナス、ハクサイなどである。力仕事で汗をかくこともあつてかにかく塩分が強かった。塩分の過剰摂

取は必然的に高血圧症、脳梗塞、脳溢血などの成人病をもたらした。脳梗塞や脳溢血で半身不随や腕、脚の麻痺を総称して「中風」とか「中風たかり」、省略して「たかり」と呼んでいた。東彦の父方の祖父母は脳溢血であった。祖母はたかりとなり、長いこと闘病生活に苦しんだ末に亡くなっている。村内にはこのような人がたくさんいた。

またこの頃、一学級当たりの児童数は五十人を超えていた。東彦のクラスも同様で、多くの子どもたちは着たきり雀で男子には鼻水を垂らしているのも結構いた。クラスの半分の児童は中学校を卒業後は就職するか家業(多くは農業)に従事した。こんな背景もあつて、親の多くは勉強よりも家事を手伝うのを良としていた。必然このような子たちの多くは授業に身が入らなかった。だからといって授業中に騒いだり、歩き回るなどということは皆無であった。先生の権威はしっかりと確立されており、尊敬も払われていた。それは子どもばかりではなく親たちもそうであり、地域のおとな全てがそうであった。勉強の理解が十分でない子どもたちにとつて授業は忍耐の時間であつたと思われ、彼らは健気にもその時間をなんの問題も起こすことなくじつと過ごしたのである。一方、教師の方も大変だったろうと推測される。「何とか分かるように指導し、勉強は楽しいもの」と体感させたいと思つただろう。その思い

はしばしば「理想」で終わってしまっただろうと推測される。

どの子にも学校での一番の楽しみは休み時間であったに違いない。これは現在にも通じることである。もちろん給食もそれに並ぶほどの楽しみであった。この頃脱脂粉乳も「ミルク」と称して供された。このミルクは二種類あった。ひとつはやや黄色がかった混じりけのない液体でバターくさかった。もうひとつはチョコレート色のつぶつぶが底に沈んでいるものである。やや甘味があった。世間ではこの脱脂粉乳はすこぶる「悪評」で通っている。しかし、東彦にはそれほど嫌な思いがない。確かに冷めるとぐんと味が落ち、敬遠もしたくなることもあったが、暖かいうちは結構いけた、と今も思っている。とにかく遊び友だちが豊富で、きちんとした給食という食事があることは、授業を除くと学校は子どもたちには天国であったと言える。

東彦にとつても学校は楽しかった。その証拠の一つに今でも担任以外の先生の名前を十人はたちどころに挙げることができる。しかも校長の名前も記憶している。三年生のときの校長は太斉武雄先生で、色浅黒く、太鼓腹、丸い黒縁のメガネを掛けていた。よく校庭で木を切ったり、地ならしをしていた。この先生は朝会で自分のことを「ヤサイタケノコ」と覚えてと自己紹介した。この時子どもたちか

かったよ」

「うん、それならいいんだよ。これからも誰にもしゃべんではねえからな」

「わがった、わがった。だけど、ずいぶんくだいね、かあちゃん。何があったの」

東彦は胸の内に湧いて来た疑問を思わずぼろりと出してしまった。

「別にたいしたごどねえけど、世間に目立つごどをすね(しない)ほうがいいがらな。昔から出る杭は打たれるっというがら。静かにしているのが一番だからな」

「だげど、おれが言わなくても蚊帳買ったなんてごとはすぐバレるんじゃないの」

「それはそうだげど何も吾が方の口から言うごどはねえんだべさ。自然にわがられる(分かれる)ごどは構わねえとにかく波風を立てねえことが大事なんだよ。よく覚えておぐんだぞ」

「だげどかあちゃんのような考えは古いんでねえの。今は民主主義の世の中になったんだすべ。何も悪いごどすてねえなら堂々とすてたらいんでねえの。新しい蚊帳買ったぐらいでそんなにおしよすがる(恥ずかしがる)ごどねえすべ。」

由美は一瞬喉が詰まってしまったような気がした。まだ

ら笑い声が起こった。しかし、東彦の記憶にはこの名前がしつかりと刻み込まれた。太斉校長の計算は実を結んだと言える。また子どもたちとよく遊んでくれた。東彦も相撲を取り、思い切り地面に叩きつけられたことをまるで昨日のように思い出される。六十六年前のことである。やはり幼児教育、初等教育では教師と子どもたちの肌のふれあいは大切である。別な表現をすれば体温を感じさせる教育である。勿論知育も欠かせないの言うまでもない。

学校から帰ると母が待っていたように東彦を迎えた。今までにないことであった。東彦はいつもの「腹減った、何かないすか」と言う間もなかった。「言う間もない」というより、母親の気難しそうな表情を見て東彦はその言葉を飲み込んでしまったというのが正しかった。東彦は「叱られる」と、咄嗟に思い思わず首をすくめてしまった。

「蚊帳のことは誰にも言わなかつたべな」

一瞬東彦は何のことかと思った。目をきよんとさせてしまった。と同時に、「叱られるのではない」と、胸を撫でおろした。

「新しい蚊帳のことだよ」

母親はじれったそうに言葉を強めた。

「あつ、蚊帳ね。新しく買った蚊帳のことだね。蚊帳のことはずっかり忘れていたから、もちろん誰にもしゃべんな

まだやるっこ(子ども)と思っていた息子が親をやり込めるほど成長しているのに驚いてしまった。

「東彦の言うごどにも一理があるな。でもこれにはちよつと事情があるからな」

由美は言ってしまったから「あつ」と思ってしまった。

「事情つてなにつしや」

案の定、東彦は由美の懸念したことを突いて来た。由美は最早隠し切れないと観念した。「とにかく家の中に入れ」と、息子を促した。そして居間の来客用のテーブルに座らせた。

「これから本当のこと話すから絶対に内緒だぞ。わがったな」

東彦は、母親の真剣な表情に気圧され、素直に「うん」と頷いた。

「実はな、五日前にとうちゃんが明け番の日、学校の東っ端にカネヘン掘りにいったごどは知っているべ。そんどき何とニッケルの板(ばん)を掘り当てだんだよ。ノロ(鉱石を溶融したとき炉の上層部にたまるかす)でなく板だからな。

最初手にした時は鉄だと思つたらすいんだ。んだげどちよつと鈍い色すているなと思つて磨いたら銀色になってきたがら、これはと思つて表面全体を磨いでたらやつぱりニッケルかなと思つたらしい。それで急いで家に帰つて来

てさらに全体を磨いて磁石を付けたらつかなくなったのでニッケルだと確信したという訳さ。それで四日前に鉄屑屋さんに売っただよ。鉄屑屋さんもおどげでねえ(びっくり)顔をすて目方計ったら、今、お金足りねえがらまだ来つから行ってしまったんだ。私だもこれはおどげでねえ(大変だ)ごどだどびっくりすてすまっただわけだ」

当時、朝鮮半島では朝鮮戦争が熾烈を極めていた。この戦争は朝鮮半島を戦場とし、一九五〇年六月二十五日から一九五三年七月二十七日まで戦闘が行われ、現在、休戦状態にある。日本はアメリカ軍の補給基地として戦争で使う重要な武器、兵器、車両、通信機器、綿布、食料などあらゆる分野の物資が大量に買い付けられた。これを朝鮮特需と呼ぶ。その額は約三年間で十一億三六〇〇ドルを超え、日本円(一ドル＝三六〇円)に換算して四千八九〇億円超という金額に上る。この特需で第二次世界大戦でポロポロとなっていた日本は一気に復活し、高度経済成長へと突入していく。

例えば、トヨタ自動車は朝鮮戦争前まではトラックの注文が年間三〇〇台がやっとだったが、この戦争後GHQから生産が追いつかないほどの注文がきて、一挙に月一五〇〇台までに拡大したという。また、当時、「東京通信工業」だったソニーは肩掛式録音機、通称「デンスケ」が大

ヒットし、青息吐息の状態であった会社は息を吹き返し、大成長を果たすことになる。

朝鮮特需は糸へん景気とか金へん景気をもたらした。特に金へん景気は東彦などの子どもたちまで潤いをもたらした。身辺にあり、見捨てられていた鉄がたちまちお金に換わったのである。子どもたちもこんな僥倖を見逃すはずはない。大概の男の子たちは金目の金属を見つけるのに血眼となった。これはおとなも同様であった。いやむしろおとなの方がなりふり構わずという状態であった。お金は人を狂わせる。これは何時の時代も同じである。東彦の近所に住む電気会社の工事人の人が会社の銅線を多量に盗み、逮捕された話はあつという間に村中に知れ渡ったのもこの頃であった。

金属類で一番高価なのがニッケル、次に銅、真鍮、鉛、鉄と続く。このような訳で身の回りの金属はあつという間になくなってしまった。したがって、ほぼ無人と化したよな東北金属工場はこれらの金属を狙う子ども、おとなたちの格好の目標になったのである。しかし、こんな現状を工場も看過する訳はなく、守衛が頻繁に巡回するようになった。以前、この金属工場の廃物の捨て場であった小学校校庭の東隅は、取り敢えず自由に発掘できるいわば「村の金鉱」のようなものだった。

鉄屑だつて売れるし」

「それは朝鮮戦争がおごつたからだよ。朝鮮戦争のためいろんな物が必要になり、日本では金へんブームがおごつたんだ。朝鮮の人だづには申し訳ねえげだな」

「なんで戦争おごつたんだべ」

「北朝鮮の一番偉い人がよぐたがりおごすて(欲を出して)韓国に攻めて来たんだらすい。もぞこい(かわいそう)のは両方の国民だべ。こないだ戦争が終わったばかりなのにまだすぐに戦争をおごすて。人間はどうすて懲りないだべがなあ」

「朝鮮でおごっている戦争は日本まで来るの」

「そんなことはねえど思うけどやっぱり心配だな。まだ空襲で逃げたり、男の人たちが戦地に取られて戦死したりはもうこりこりだ。絶対に戦争なんておごすたらだめだ。一番悲しい、苦しい思いするのはおれだづ庶民だがらな」

「考えてみたら、金へんブームなんて調子こいで喜んでるのは罰当たりかもしれないねえな」

「なんでつしや、かあちゃん」

「よぐ考えてみる。おれだづが売つた鉄や銅、それにニッケルが爆弾や鉄砲玉に変わつてそれで朝鮮の人だづが殺されているかもしれないねえ。隣の人の不幸でおれだづの幸せを買っているっていうことだべ。戦争で負けた教訓が少しも

東彦の父親もたまたま気が向いて行って一番高価なニッケルを掘り当てたのだった。もし、このことが人の口の端にでも上ろうものなら近郊近在から人々が押し寄せるのは必至であった。また、「大金が入った」などという噂が流れたら「ちよつとお金を貸して」ぐらいはまだましで、不埒な考えを持つ者が出てきたらそれこそ大ごとであった。東彦の母はそのことを心配したのでくどいほど東彦に念を押したのであった。

この当時、六畳用蚊帳は五千四〇〇円ほどであった。手紙が二十円であったから単純計算で現在の金額に直せば四倍の二万円ちよつと言える。結構な値段である。父親が掘り当てたニッケルは恐らく現在の金額に直すと二万円前後であったろうと思われる。大金である。鉄屑屋さんも驚いただろうし、東彦の両親も肝を潰すほどであったろう。「かあちゃん、それでカレーの肉もいつもより多く買ったのすか」

「んだ。父ちゃんが子どもたちに何かうまいものを腹一杯食わせてやろうつて言ったから、いつもより多く肉の入ったライスカレーをこしやえた(作つた)というわけ」

「ふーん、ニッケルのお陰っていうわけだね」

「んだ、ニッケル様々だよ」

「だけど、どうすてそんなにニッケルが高いの、それに

生かされていねえな」

「啓造だづは大丈夫だが」

「東彦、そのごとは心配ねえべ。智ちゃんだづは日本にいるんだがら、何の危害もねえと思うげど。ただ金山さんが北朝鮮の人だがら、日本人から今まで以上に嫌がらせや暴力を受けなければいいけど」

「もし学校で啓造ちゃんがいじめられたら助けてやんねどな」

「うん」

東彦は母の言うことをやれるはずはないと内心思った。もしそれをやったら東彦がいじめの対象に加えられることは必定だった。しかしながら、ここで「できない」と言えば母の心証を悪くすることは分かりきったことだった。曖昧に返事するしかなかった。

「また罪もないたくさんの国民が死ぬんだべえなあ」

つぶやくように言って由美は稲穂の揺れる田んぼの方に目をやった。

この朝鮮戦争は朝鮮半島全土が戦場になったため多くの市民が犠牲になった。しかし、資料によってその数字が異なるが軍人、市民合わせて四百万人におよぶという。そのうち朝鮮市民の死者は二百万人という。(※4) ちなみに第二次世界大戦での日本人の死者は、市民が八十万、軍人

が二三〇万の合計三百十万人である。

なお、あまり知られていないことだが、この戦争でアメリカ軍の機雷掃海に従事した日本人数十名のうち「処分に失敗して数人の死者(氏名の判明しているものは一名)が出ている。

「もうなあ、空襲で逃げ惑ったあの苦しさは二度と味わいたくねえ。東彦、戦争は絶対してはなんねえぞ。勇ましいことを言っつけてしかける人間の言うことは絶対に聞くんねえぞ」

母の言葉に東彦は胸の奥でぐつと頷いた。一九四五年七月十日、仙台は米軍のB29の空襲により市中央部は焦土と化した。そのとき東彦は母に背負われ十数<sup>キ</sup>離れた母の兄嫁の実家、秋保に逃げた。その時の恐怖が脳に染みついたのか生涯離れることはなかった。その証に「宮城県地区空襲警報発令」という言葉がすいっと口から滑り出して来ることがある。

「おれたちは百姓の生まれだからな。いつも地面にしっかりと足をつけてうまい話だどがおだてには決して乗ったらだめだがらな。お役人さんや政治家の人たちというのはいつも安全なところにおいておれだづ庶民をけしかけてくるから注意するんだぞ。それに人を差別してはなんねい。これも元を質せば偉い人たちがおれだづ庶民をうまいこと操るた

た玄関からスイと外へ飛んで行った。その先にはずしりと垂れた稲穂の豊穰の海が広がっていた。

(この章終わり)

「わがった。おれも戦争っておつかねえごとぐらいはわがっているっしや。それに啓造のことはできるだけかばってやるようにするよ」

「よがった、よがった」

「あつ、トンボだ。赤トンボだ」

東彦が大声を上げながら玄関の方を指指した。玄関の開いた扉から赤トンボがすいっと入って来たのだ。赤トンボは居間の中を不安気に旋回しながら飛び続けた。

「暑い、暑いと思っけていてもやっぱり季節はたしかだな。もう秋だ」

「トンボって自由なんだなあ」

東彦はうらやましそうに言った。その瞬間緊張が解けたのか「腹減った」と叫んだ。

「まったくおめえは食いっただかりだ(食欲旺盛)なあ。晩ご飯早くすつからもう少しがまんすてろ」

由美は苦笑いをしながら「よいこらしよ」とかけ声をかけ、立ち上がった。

まるでその声に押されたかのように赤トンボは入って来

#### 参考文献

- ※1 加太こうじ 『紙芝居昭和史』 立風書房
- ※2 『戦後値段年表』 朝日文庫
- ※3 ハウス食品
- ※4 神谷不二 『朝鮮戦争 米中対決の原形』